

# A-1

## 初期サンスクリットにおける印欧祖語の音節核鼻音 \*ŋ と喉音 \*H の連続の反映

塚越柚季

### 要旨

サンスクリット最古の文献『リグ・ヴェーダ』(RV)は、韻律詩であり、音節の数と軽重のリズムは規則的である。『リグ・ヴェーダ』の創作者と編纂者らには、数百年の隔たりがあるため、現行のテキストには編纂者らの時代の言語によって元来の詩が改変され固定されたと考えられる箇所が存在する。このような箇所は不規則な韻律をもつが、その一部は、印欧祖語形などサンスクリットの前段階の語形を考慮することで、規則的な韻律に復元できる場合がある。本発表では、『リグ・ヴェーダ』に現れる語形のうち、再建される印欧祖語形で音節核鼻音と喉音の連続 \*ŋH- を持つ語形に焦点を当てる。\*ŋH > an を含む音節が、表面上軽音節であっても『リグ・ヴェーダ』の韻律上は重音節であることを指摘し、喉音 \*H の残存あるいは \*ŋH > ā という変化を経たことで、\*ŋH > an が重音節として韻読されると主張する。

### 1 『リグ・ヴェーダ』の韻律復元

#### 1.1 『リグ・ヴェーダ』の韻律

『リグ・ヴェーダ』は、いくつかの家系の数世代の詩人らが創作した讃歌集である。全10巻から成り、各巻は複数の讃歌から構成され、讃歌はさらにいくつかの詩節に分けられる。以降、『リグ・ヴェーダ』本文を引用する際は、巻・讃歌・詩節・行を指定する。

『リグ・ヴェーダ』の各詩節は一定の音節数と音節の軽重のリズムで定義される韻律を持つ。軽音節は音節核が短母音で尾子音を持たない音節、重音節は音節核が長母音であるか尾子音を持つ音節である。これら音節の数と軽重のリズムは規則的である。各行のうしろ4音節または5音節の部分をカデンツという。カデンツより前の音節の軽重のリズムには一定の傾向が見られるほか自由だが、カデンツにおける音節の軽重のリズムは極めて規則的である。例えば、Triṣṭubh は1行あたり11音節×4行の詩節の韻律であり、各行のうしろ4音節(カデンツ)は、ほとんどの場合(90%以上)トロカイオス詩脚2つ分=(重音節+軽音節)×2の軽重のリズムを持つ。他の韻律においても、1行の音節数に応じて規則的にトロカイオス詩脚2つ分やイアンボス詩脚2つ分などのリズムを持つ。

|             |                       |
|-------------|-----------------------|
| 1行8音節のカデンツ  | イアンボス×2(◡ — ◡ ◡)      |
|             | 時にトロカイオス×2(— ◡ — ◡)   |
| 1行11音節のカデンツ | トロカイオス×2(— ◡ — ◡)     |
| 1行12音節のカデンツ | トロカイオス×2+1(— ◡ — ◡ ◡) |

## 1.2 韻律復元法

現行の『リグ・ヴェーダ』本文は、紀元前 1000 年以前の創作者 (詩人) らから口承され、数百年後の紀元前 8 世紀頃に編纂者らにより固定された。そのため詩人と編纂者の言語は、時代差による通時変化を経ていると考えられる。不規則な韻律をもつ詩節は少なくないが、その多くは、印欧祖語形などサンスクリットの前段階の語形を考慮することで、規則的な韻律に復元できる場合がある。ただし、詩人が意図的に韻律を改変した詩節も存在し、このような詩節は韻律復元の対象にはならない。

不規則な韻律をもつ詩節は、次の手法などにより韻律を復元できる場合が多い:

- (1) 半母音  $y, v$  を母音  $i, u$  として読むと、不足する音節数が補われ、音節の数や軽重が想定されるものに一致する場合がある。例えば、*súr.yas* 「太陽. 単数主格」は 2 音節であるが、讃歌 RV 1.50 中 4 つの詩節 (4, 7, 8, 11) ほか 15 箇所 *sú.ri.as* と 3 音節で読むことで韻律通りに復元される。
- (2) 祖語形から導かれる母音の長短と異なる母音の長短を持つ語幹を祖語形から導かれる母音の長短で読み替えることで韻律が復元される場合がある。*pāvákā-* 「純粹な」(— ◡ ◡; — は重音節、◡ は軽音節、◡ は軽重を指定しない) は、RV 中全ての出現箇所 *pavākā-* (◡ — ◡) と読み替えることで韻律復元がなされる。この語は中期ペルシア語の *pavāg* に対応する (Bartholomae 1906: 98)。
- (3) 連声によって結合した母音の解除や消失した母音の補完によって不足する音節数が補われ、韻律復元が可能な場合がある。サンスクリットの連声には様々な種類があるが、語境界において母音が連続するとき境界部の母音が義務的に融合する連声がある。また、語末の  $-ē/-ō$  の直後の語頭の  $a-$  が消失する連声もある。これらの連声を起こした箇所は、連声を起こす前の母音が連続した形に戻すことによって、規則的な韻律になることが多い。さらに、 $-ē/-ō$  の直後の  $a-$  は、消失していない状態でテキストが固定されている箇所もある (e.g. RV 7.60.7b *cikivāṃso acētásam nayanti* 「[天地を] 認識している彼らが無理解のものを導く。」)。
- (4) 印欧祖語に再建される喉音  $*h_1, *h_2, *h_3$  (まとめて  $*H$ ) が『リグ・ヴェーダ』に残存していたと考えると韻律復元が可能な場合がある (Gippert 1993, 1997)。例えば、*sa.nat* 「勝ち取る. 指令法現在能動 3 人称単数」(◡ ◡<sup>\*1</sup>) は、出現箇所の韻律から、第 1 音節が重音節として韻読される。印欧祖語形は  $*senh_2-e-t$  と再建される。『リグ・ヴェーダ』詩人が喉音を保存していたならば、印欧祖語形  $*sen.h_2et$  の音節構造はそのまま保たれ、*san.Hat* (— ◡) 第 1 音節が重音節として分析される。ここで『リグ・ヴェーダ』に残存していたと考えられる喉音は  $H$  と表記する<sup>\*2</sup>。実際に RV 1.100.6 では、*san.(H)at* の第 1 音節を重音節と分析することで、音節の軽重のリズムが韻律通りになる。

\*1 ◡ は軽音節、— は重音節、◡ は軽重を指定しないことを表す。

\*2 印欧祖語における  $*H$  は 3 種の喉音の内いずれかを指定しないときに用いるもので、これと異なる。

## 2 \**ŋ* と \**H* の連続

### 2.1 \**ŋ*, \**H* について

印欧祖語には、音節核として扱われる鼻音 \**ŋ* が再建される。例えば、否定の接頭辞 \**ŋ*- (ギリシア語: *ἀ(v)-*, ラテン語: *in-*) に見られる。サンスクリットでは母音として \**ŋ* > *a* に変化する、鼻子音を伴って \**ŋ* > *an* に変化するなど、音環境により \**ŋ* の反映形は異なる。

印欧祖語に再建される喉音 \**H* (\**h*<sub>1</sub>, *h*<sub>2</sub>, *h*<sub>3</sub>) はアナトリア語派を除く娘言語で消失または変質した。印欧祖語の3種の喉音は、インド・イラン祖語で1種の喉音に合流し、サンスクリットでは母音の前で消失したとされる。サンスクリットにおいて音素としては消失した喉音も、母音の長母音化や破裂音の氣息音化などに痕跡を残す。また、1.2節で挙げたように、『リグ・ヴェーダ』の韻律を根拠に、詩人の時代には全てまたは一部の喉音が残存し、編纂者の時代には消失していた可能性が指摘されている。

### 2.2 \**ŋH* > *an*

本節では、サンスクリット語形において \**ŋH* > *an* と現れる語が、『リグ・ヴェーダ』詩節のカデンツに出現し韻律に影響を及ぼす例を見る。

まず、サンスクリットでは否定の接辞は2つの異形態 *a-*, *an-* を持ち、*a-* は子音の前、*an-* は母音の前に現れる。さて、サンスクリットの *ánṛta-* 「虚偽」は、否定の接頭辞 *an-* < \**ŋ-* と *ṛtá-* < \**h*<sub>2</sub>*r-tó-* 「真理; 真実の」とに分けられる。*ánṛta-* の音節構造は V.CV.CV = ◡ ◡ ◡ であり、第1, 2音節は軽音節である。しかしながら、*ánṛta-* が韻律に影響を及ぼす箇所に出現する詩節 RV 1.105.5c は、この語幹の第1音節の箇所が重音節であることが想定される韻律を持つ。

RV 1.105.5c *kád. va. ṛ.tám. ká.d á.nṛ.taṃ* — ◡ ◡ — | ◡ ◡ ◡ —\*<sup>3</sup>

‘What is truth for you, what is untruth?’ (J&B\*<sup>4</sup> 251)

この詩節の韻律は、1行8音節が5行、各行後半部がイアンボス詩脚2つ分(◡ — ◡ ◡)であり、*á.nṛ.ta-* の第1音節すなわち、行末から3音節目は重音節であるはずである。このように、表面上は軽音節であるが韻律上重音節である音節を持つ語幹は他にも存在する。以下にサンスクリット語形(語幹)、印欧祖語形、出現箇所を挙げる。

*ánapacyuta-* < \**ŋ-h*<sub>2</sub>*epo-kju-to-* 「追い払われない」(Mayrhofer 1992: 82):

RV 8.26.7c *ma.g<sup>h</sup>á.vā.nā. su.vī.rā.v á.na.pac.yu.tā* ◡ ◡ — — ◡ — — | ◡ ◡ — ◡ —

‘unbudgeable bounteous ones, bringing good heroes’ (J&B 1084)

\*<sup>3</sup> | より後ろがカデンツ。

\*<sup>4</sup> Jamison & Brereton (2014) を J&B と略すこととする。

RV 9.111.3f *váj.raś. ca. yád. bhá.van.t̥hō. á.na.pac.yu.tā* — — ∪ — ∪ — — | ∪ ∪ — ∪ —  
 ‘and his mace become unbudgeable’ (J&B 1363)

*an̥c-* < \**ṇ-h<sub>1</sub>r̥k<sup>w</sup>*- 「歌のない」:

RV 10.105.8b *ṛ.cā. va.nē.ma. = a.n̥.caḥ* ∪ — ∪ — | ∪ ∪ ∪ —  
 ‘By our verse might we vanquish those without verses’ (J&B 1568)

*sanutár-* < \**sṇH-u<sup>o</sup>* 「離れて」 (Mayrhofer 1996: 697):

RV 5.87.8 *á.pa d.vé.sām.si. sa.nu.tāḥ* ∪ — — — | ∪ ∪ ∪ —  
 ‘[keep] hatreds far away in the distance’ (J&B 771)

*ánapacyuta-*, *anapnás-* とともに、カデンツに現れるときは常に第 1 音節が韻律上重音節である。*an̥c-* はそもそも『リグ・ヴェーダ』における出現は 10.105.8 のみである。しかし、*sanutár-* は RV 1.123.2, 10.7.4 においては第 1 音節が軽音節であることが想定され一貫性を持たない。また、*anapnás-* < \**ṇ-h<sub>2</sub>ep-nes* (Mayrhofer 1992: 88) は RV 2.23.9 のみに現れるが、この詩節の韻律から第 1 音節は軽音節のままであることが想定される。そのように、『リグ・ヴェーダ』における \**ṇH* の反映が、母音の前で常に重音節と韻読されるわけではない。

表面上軽音節に見えるが韻律上重音節が予期されるこれらの語幹について、以下の 2 つの可能性がある。まず 1.2 節で紹介した喉音の残存を想定した韻律復元方法に基づくとする、つまり、『リグ・ヴェーダ』の詩人が喉音 \**H* を保存していたとする。\**ṇ* は母音および喉音の前では *an* と変化するため、サンスクリット語形における喉音を *H* と表すと、例えば *ánṛta-* に対して *án.Hṛ.ta-* という形が提示される。否定接辞が *an-* であり喉音が残存していると、*-n-* は第 1 音節の尾子音となり第 1 音節は重音節として分析される。

一方で、喉音が直前の音節核鼻音 \**ṇ* を長母音化しているとする (cf. \**eH* > *ā*, \**iH* > *ī*, \**uH* > *ū* / \_C)。このとき、例えば *ánṛta-* は *á.ṛ.ta-* となり、第 1 音節は長母音の音節核を持つため重音節である。ただし、ここには *ā.ṛ* という母音連続が存在するが、サンスクリットでは形態素内に母音連続を含む語は極めて稀である。

### 2.3 \**ṇH* > *ā*

2.2 節で見た例と異なり、\**ṇH* > *ā* / \_ [-sonorant] と変化する例も見られる: *jāta-* < \**ḡnh<sub>1</sub>-to-* 「生まれた」 (Hoffmann and Forssmann 1996: 70, Kobayashi 2004: 93)。他に、*d̥ārā-* < \**d̥ṛH-reh<sub>2</sub>-* 「流れ」 (Mayrhofer 1992: 789); *vāmá-* < \**uṇH-mó-* (~*van<sup>i</sup>*) 「愛しい」 (Mayrhofer 1996: 544)。加えて、語頭に *ā* を持つが、否定接辞が付されたと考えられる語幹も存在する。*ásat-* 「非存在」は、動词语根 *as* の能動現在分詞 *sat-* に否定接辞 *a-/an-* を付した語幹だと考えられる。

RV 4.5.14d *anāyud<sup>h</sup>ásaḥ ásatā sacantām*

‘Without weapons, let them be accompanied by (speech) that does not come true’ (J&B 567)

RV 7.104.8d *ásann ast<sub>v</sub> ásatá indra vaktá*

‘let the speaker of nothing come to nothing, Indra’ (J&B 1016)

しかし、*sat-* に否定接辞を付すならば *asat-* になるはずであり、*ā-* なる長母音は予期されない。これは、*as* < *\*h<sub>1</sub>es* の祖語形に再建される喉音 *\*h<sub>1</sub>* の影響により *\*ñ-h<sub>1</sub>snt-* > *ásat-* という音変化を受けたと説明される (Mayrhofer 1992: 35)。

## 2.4 『リグ・ヴェーダ』における *\*ñH* の反映

2.2 節では、*\*ñH* > *an* と変化したが *a* を含む音節は重音節であることが期待される語幹を見た。喉音の残存あるいは喉音による音節核鼻音の長母音化によって重音節であることの説明は可能である。さらに 2.3 節の中で特に *ásat-* < *\*ñh<sub>1</sub>snt-* 「非存在」を見た。他の語幹でもこれと同様の变化を経たとするならば、*ánṛta-* < *\*ñh<sub>2</sub>rto-* 「虚偽」を例にとると、ここでも *árta-* < *\*ñh<sub>2</sub>rto-* なる变化を経た可能性がある。『リグ・ヴェーダ』詩人らは編纂者の時代など後代のサンスクリットほど母音連続を忌避していたわけではないことが、1.2 節に挙げた『リグ・ヴェーダ』の韻律復元法 (3) から指摘される。しかし、遅くとも編纂者の時代の音連続制約では、母音連続 *ār* は許容されない。また、その時代の規則に従えば *ṛtá-* 「真理」に付される否定接辞は *an-* である。そのため、*ánṛta-* という語幹でテキストが改変され固定されたと考えられる。

## 3 課題

*ánṛta-*、*ánapacyuta-* などは、『リグ・ヴェーダ』詩節のカデンツに現れるとき常に第 1 音節が重音節として韻読されるが、*sanutár-* は 3 例中 1 例のみにおいて第 1 音節が重音節として韻読され他 2 例では軽音節のままである。さらに、出現回数が 1 であるものの *anapnás-* < *\*ñh<sub>2</sub>epnes-* は第 1 音節が軽音節のまま韻読される。『リグ・ヴェーダ』における音節の軽重が一貫していないことから、音韻規則として考えることには問題がある。しかし、『リグ・ヴェーダ』の詩人らの間でも時代差・地域差があると考え、一貫性の欠如が詩人方言に由来するとして解決されうる。

さらに、印欧祖語の音節核鼻音は *\*ñ* のみならず *\*ṃ* も再建される。*d<sup>h</sup>ámati* < *\*d<sup>h</sup>amáti* < *\*\*d<sup>h</sup>ṃH-é-ti* (Gotō 1987: 46) は RV 5.9.5d において、第 1 音節が重音節として韻読される。中動現在分詞 *\*-ṃh<sub>1</sub>no-* > *-āna-* との関係から、*\*ṃH* も *\*ñH* と同様の变化をした可能性がある。

## 4 略号

J&B: Jamison & Brereton (2014), RV: 『リグ・ヴェーダ』

## 参考文献

Gippert, Jost (1993) Zur Phonetik der Laryngale. In: Jens E. Rasmussen (ed.) *In honorem Holger Pedersen. Kolloquium der Indogermanischen Gesellschaft vom 26. bis 28. März 1993 in Kopenhagen*, 455–466.

Wiesbaden: Reichert.

- Gippert, Jost (1997) Laryngeals and Vedic metre. In: Alexander Lubotsky (ed.) *Sound law and analogy. Papers in honor of Robert S.P. Beekes on the occasion of his 60th birthday*, 63-79. Amsterdam: Rodopi.
- Gotō, Toshifumi (1987) *Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen: Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Hoffmann, Karl & Bernhard Forssmann (1996) *Avestische Laut- und Flexionslehre*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Jamison, Stephanie & Joel P. Brereton (2014) *The Rigveda: The earliest religious poetry of India*. New York: Oxford University Press.
- Kobayashi, Masato (2004) *Historical phonology of old Indo-Aryan consonants*. Fuchû-shi, Tôkyô: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Mayrhofer, Manfred (1992) *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen I Band*. Heidelberg: Universitätsverlag Carl Winter.
- Mayrhofer, Manfred (1996) *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen II Band*. Heidelberg: Universitätsverlag Carl Winter.